

著書紹介

「神風（シンパラム）がわく韓国（くに）」（吉川良三著：白日社）

著者の吉川良三氏（JKIT 会長）が、1994 年からサムスン電子の常務として韓国に滞在した時の体験をもとに、韓国と日本の文化やビジネス慣習の違いをまとめた書であり、日韓間のビジネスに関わる人にとって、韓国の文化や日常を知る上で、参考になる指摘と考え、シリーズで要約をご紹介します。

<第3回> 韓国人とは、どんな人たちなのか

著者は、韓国文化と日本文化は、80%以上が異質な文化であると気づいたと指摘しており、今回は、韓国文化の原点、すなわち、その特有の民族性や精神構造について紹介します。

ただし、原著も「手さぐりの仮説」であるとの断わり付きである。

1. 韓国人の自尊心を支えるもの

(1) すべての人間は、天から「理」を与えられた

韓国神話によれば、「檀君」という神が、人間に神の叡知である「ロゴス（理）」と「パトス（気）」を伝えた。

「理」は宇宙を統べる理（ことわり）であり、人間世界でいえば、理知的な精神領域（理性）である。その基本は、人間はみな平等であり、お互いを尊重しなければいけないという考え方で、この思想は「弘益人間」という言葉として、現代の韓国語にも残っている。

一方の「気」は情熱・感情の精神領域で、その最高形態が「神風（シンパラム）」である。

「理」の側面は、「王」という漢字に象徴され、上中下 3 本の横棒が「天」「人」「地」を表し、これらを一つのものとして縦棒が結んでいる。韓国の「平等思想」「人間尊重」思想はこの神話に始まっている。

天・地・人は、人間の世界では、「天」が父に、「地」が母に、「人」が子に対応し、「父親は天のごとく敬いなさい」、「母親は地のごとく敬いなさい」「子は天が定めたように孝行しなさい」と親子関係の倫理が説かれる。同様な人間関係の倫理が、君臣、師弟、夫婦、兄弟、朋友について説かれており、「五倫」と呼ばれる。

「理」の哲学は、今でも韓国人一人ひとりが持ち続けており、彼らを支える強烈な自尊心の土台となっている。

(2) 太極旗を愛する韓国人

韓国の国旗「太極旗」は中心に太極（万物の源）である宇宙を据え、四隅にそれぞれ天・地・日・月を配し、永遠不滅、宇宙万物の基本原理を表現している。

韓国人のこのような国旗への愛着は、単なる愛国心からだけでなく、人類とか世界、あるいは宇宙に対する敬意から来ているのではないかと考えられ、韓国人が国旗を見上げる時胸に手を当てているのは、宇宙に存在している一人の人間として、立派に生きていきたいという願望を心のどこかに強く感じているからではないか。

この「理」に基づいた宇宙的理念が、韓国人に伝統的に受け継がれてきた民族的自尊心の本質であると思う。

2. 「神風（シンパラム）」がわき起こる国

(1)「神風 (シンパラム)」と「神風 (カミカゼ)」

韓国人の精神を形成する「気 (パトス)」のクライマックスは、「天」と「地」が一つになった時に起こる「神風 (シンパラム)」である。

日本における「神風 (カミカゼ)」は、いわば「神頼みによる力」であるのに対して、韓国における「神風 (シンパラム)」は、民族がある共通の目的を持ち、そこに一体感や信頼感が生まれた時に、一人ひとりが自分の能力を超えた 120%から、時には 150%の力を発揮する現象を言っている。

(2)「神風 (シンパラム)」は民の力

韓国人にとって、韓国語の「シンパラム」は、きわめてあたりまえの言葉、概念であり、現在では、「シンパラム革新」とか「シンパラム経営」のようなキャッチフレーズも流行している。

「神風 (シンパラム)」の原点は、いろいろな説があるものの、人間の気持ちが少しでも神に近づいた時、自然に吹いてくる、あるいはわいてくる風のことのように、重要なのは、指導者とか、上に立つ人が意図しても吹いてこず、あくまでも下からわいてくる風なのである。

(3)韓国を破産から救った「神風 (シンパラム)」

1997年の末に韓国が破産状態になり、IMFの支援を受けた時、大多数の国民が持っている金製品を自発的に（大統領や政府の要請ではなく）放出し、それを輸出して実に 250 億ドルという外貨を獲得したり、食堂やスーパーマーケットが IMF 価格といって通常の値段より 2 ~ 3 割安くして消費者に協力したり、消費者も浪費を控えたりして、全大衆が一体となり国の危機を乗り切った原動力も、まさにこの神風 (シンパラム) であった。

(4)興 (フン) が起こっているところに人が集まる

神風 (シンパラム) がわきおこる韓国人々の情緒構造はどうなっているのか、それを表わすキーワードの 1 つが「興 (フン)」である。

神風を起こす、きっかけとして必要なもの、それが「興 (フン)」であり、一番近い日本語は「ムードの盛り上がり」かもしれない。

韓国の伝統的な踊りや太鼓演奏では、興 (フン) が起こると、手の動きが活発になって動作が大きくなっていく。また、葬儀の際に号泣するような悲しみという感情が盛り上がるのも興 (フン) の一つである。

この興 (フン) が起こるためには、3つの条件「人員に制限がない（誰でも入れる）」、

「時間に制限がない」、「リーダーがいないこと」がそろふ必要があり、これは、神風 (シンパラム) が起こる条件と、基本的に同じで、その根底にあるのは「韓国人は枠や規則にしばられるのが大嫌い」ということである。

3. 「恨 (ハン)」から「傲気 (オウギ)」へ

(1)「恨 (ハン)」は「怨 (ウラミ)」ではない

キーワードの 2 つ目が「恨 (ハン)」である。日本人の恨みは、他人に向かう怨念であるが、韓国人の「恨 (ハン)」は他人に対する怨みではなく、自分自身に対する悔しさ、恨みである。

この「恨（ハン）」は逆に励みにもなり、貯まりに貯まった恨は、自分が生きていくエネルギーの源にもなる。それが、第3のキーワード「傲気（オウギ）」であり、一種の口惜しさ、恨みのことであるが、他人に向かうものではなく、自分自身の中に蓄積され、マグマのように爆発を待つ情感なのである。

(2)第4のキーワード「ウリ」

韓国における個人と社会の関係は、あくまでも「ウリ（われわれ）の中のナ（私）」であり、アメリカのような個人主義だけとは異なり、「集団の文化」が前提にある。しかし、ここには、日本のような上下関係は存在せず、まったくの水平意識である。

ウリ（われわれ）は家族、地域、会社、国家などであり、その中に個人主義のナ（私）が位置している。常にウリの中に身をおいていないと生きていけないのが韓国人で、しかも自分のウリ以外の人間とは深く付き合おうとしない。

(3)人情に生きる共同体

韓国の人々の心の奥深くには、常に「恨（ハン）」や「傲気（オウギ）」といった感情が横たわっていて、それが共同体意識である「ウリ」と結びついて、仲間に対する厚い人情が生まれる。

韓国には、「人情に生きて、人情に死ぬ」という表現があるように、庶民感覚の人情が非常に強い社会である。人情は社会システムや法さえも超えてしまう面があり、家族閥から地域閥、学校閥というような、さまざまな強固な共同体（ウリ）を構成していく。

4. 実際は複雑な行動と精神

韓国人気質の根底に、「神風」「興」「恨」「傲気」といった精神文化があることは間違いないが、現実の韓国人にこれらのキーワードがぴったりと当てはまるわけではない。これらは韓国人特有の考え方や社会構造と絡み合い、一見、相矛盾する行動となって現れる。

(1) 韓国人の悪口は世界一

韓国人にとって、「恨」は自分自身の中に堆積していく悔しさだから、いつかこれをほぐさないと疲れてしまう。そのための発散手段として「自分を認めてもらう行動」をいろいろとやるが、自然の成り行きで、それは他人のことを考えない自己中心的なものになりがちである。その典型的な例が悪口で、「自分はよい、他人は悪い」といつのる。

確かに、韓国人の悪口はひどく、多種多様な表現、レトリックを用いて、徹頭徹尾、他人の悪口をいう。しかし、実は、自分自身への「恨」を解き放つ行為であり、あまり気にしないほうがよい。

(2) 縮む日本、ほぐす韓国

日本人には、常に相手を立てる意識が先にあり、相手を大きく遇し、自分は小さく控える。すなわち、日本は「縮む文化」、枠にはめる文化であるが、韓国人はもともと「発散する文化」、枠にはめるのが嫌いな文化なのである。

日本人は、何かをさせる時「気をつけてやりなさい」とい言い方をするが、韓国人に仕事をさせる時は、必ず「リラックスしなさい」と言わなければ、反発して何もしない。

(3) 神風新世代

韓国の新しい世代と呼ばれる人々は、こうした傾向、心情をより強く持っているように見える。

その特徴は

- ・ 自我実現と価値の追求、恨をはらし価値を追求する気持ち
- ・ 一人ひとりが個性的で考え方に多様性がある
- ・ 徹底した平等意識と、その裏表である権威の否定という意識
- ・ 革新的で冒険的なこと
- ・ 何でも問題を簡単に考えてしまうこと、都合のよいように解釈してしまうこと
- ・ 小市民的で現実主義であること

こうした韓国人の性格や文化が、今後の情報化社会においては、有利に働く可能性が高いと筆者は指摘している。

(4) 韓国人は、やっぱりキリギリス？

神風がわきおこり、全員一丸となって事にあたることもあるが、平素の韓国人は、公平に見て、見栄っぱりで遊び好き、仕事はお金のために仕方なくやるものと思っているのは間違いない。

韓国人は仕事をしながら歌を唄い、唄いながら仕事をするタイプである。韓国人にとって仕事、仕事の四角四面の人間像は、趣（モツ）（杵を外れるかっこよさ）の対極にある「不粋」の象徴なのである。

(5) 「助けて！」でなく「人間を生かせ！」

人間が危機に瀕した時、せっぱつまった時に発する言葉には本音が出ている。

英語では「ヘルプ・ミー」で、あくまで自分を助けてくれで、これは欧米の個人主義を典型的に表している。日本では、「助けて！」と目的語がない言葉を使う。自分だけを助けてとはおそらく誰も思わないし、言わない。このようなせっぱつまった場面でも集団主義の日本人の心情が表れるのだろうか。

韓国では「サラム・サリョ」（人間を生かせ）なのである。韓国人は、常に、他人に対して、自分という人間に対する公平でやさしい扱い、すなわち「仁」を求めている。

以上